

カトリック仙台司教区・カリタスジャパン 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

仙台教区復興支援活動に関わってくださる皆様、新年のご挨拶を申し上げます。

平賀 徹夫

年が改まり2012年となりました。SDSCは昨年3月16日の立ち上げ以来、9月までの6ヶ月を第1期、それ以降を第2期として、本当に大勢の皆様のご支援に支えられながら、被災され苦しんでおられる方々に寄り添い助けになりたいと活動してきました。皆様に心底から感謝申し上げます。

いま、わたしは聖書の中の2箇所を思い浮かべています。わたしたちの活動はただ人道的な意味からだけでなく、キリストが人を大切に、苦しんでいる人を慈しみ、寄り添われたその生き方に倣いたいということがありました。わたしたち自身が、共にいてくださるキリストに力づけられながら、キリストの心を(直接言い表さずとも)伝えられたらいいな、ということだったでしょう。被災して避難所に身を寄せ緊急の支援を必要としておられた方々が第2期の仮設住宅生活に移られたいま、その方々の助けになればいいと望むわたしたち自身はキリストとの出会いをどの程度意識しているかなと思ったとき浮かんだのが、ルカ24章のエマオへの二人の弟子の物語でした。キリストと一緒に歩いてくれているのにそれと気づかなかった。わたしたちは自分のできることが全くちっぽけなものに過ぎないと感じるとき、どれほどの役に立つのかと無力感に襲われかねません。

そんなとき改めて信仰を奮い起こし、心を燃え立たせてくださるよう一層の祈りをささげる必要を感じるのです。もう1箇所は使徒言行録3章6節のペトロの「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう」という言葉です。ペトロは生まれながら足の不自由な人をイエスの名によって癒してあげました。わたしたちも金銀はありません。でも「あなたは大切な方なのだ」と



平賀司教さまと全ベースのスタッフ、サポセンスタッフ

という神の思いを何とか伝えられたらいいと思います。これも、そのように働く者とならせてください、という祈りなしには伝わることはないでしょう。

この新しい年も、わたしたちの思い・願い・働きが、神様の祝福のうちに被災された方々への助けとなりますようにと祈りながら、一緒に進んでまいりましょう。

大塚司教、大船渡市長代理、岩手県知事代理の3人でテープカットが行われ、参加者たちは、盛大な拍手で喜びを表していました。その後、記念撮影を行い、祝賀会に移りました。

地の森いこいの家！ オープン！

2012年1月14日(土)大船渡ベースの開所式は、まず、大船渡教会での開所式ミサで始まり、その後、幼稚園で軽食をいただきながらの交流会、そして、午後2時から大船渡ベースに場所を移し、開所式、祝賀会と続きました。

開所式ミサは、大阪教会管区代表として大塚司教が主司式、平賀司教、菊地司教をはじめ、約12人の司祭の共同司式で始まりました。岩手県各地の教会から参加した信徒も含め、約130人が参加し、喜びのうちに大船渡ベースに関わるすべての人、ボランティアの方々の働きを神にささげ、祝福を祈り求めました。



感謝状を頂く、カリタスの菊地司教！

大船渡教会の信徒の方々によって、教会付属「海の星幼稚園」ホールに軽食と飲み物が準備されており、なごやかに交流しました。

午後2時の開会式に先立ち、岩手県知事からカリタスジャパンに対し、岩手県被災者のうち「見なし仮設」に入居している人々への暖房器具支援について「感謝状」が贈呈されました。

まず、平賀司教が、大阪教会管区が大船渡にベースを開設してくださったことに感謝し、開会の辞を述べ、次いで主催者を代表して大塚司教が挨拶。来賓祝辞は、大船渡市長祝辞が代読された後、「地の森いこいの家」建設に当たった建築業者に感謝状が大塚司教から手渡されました。



ベースの前で記念写真！

サポセン人物リレーその2

仙台サポセン 常勤スタッフ 東仙台教会信徒 赤井悠蔵

震災の数日後、元寺小路教会を訪ねた時、小松神父様は「無事でよかった！」と熱く肩を抱きしめてくださいました。その時の安心感と感動は今でも忘れられません。さらに数日後、神父様から「教会のボランティアを手伝って欲しい」との連絡をいただき、教会に駆けつけ、今に至ります。カリタスアメリカのスタッフと赤井君！

我が家は大きな被害もなく、私自身も比較的時間が割ける状態にありました。そんな自分に神様が望まれることはなにかを見つめ、少しでも御旨にかなう事ができるよう、願う毎日です。事務局のスタッフは、直接被災地に出向いたり、被災した方々と直に接する機会はほとんどありません。しかし、全国から集まるボランティアの「サポート」としての大切な役割をいただいているという責任を感じています。人との繋がりという大きな輪の中で自分もまた生かされている、そのことを忘れず歩んでいきたいと思えます。



こまつのみたて 赤井悠蔵君はまことに不思議な生き物である。彼は人間の言葉には必ず反応を見せる。彼に対して話しかけていない言葉にも反応する。良くも、悪くも人懐っこい、たまに、うるさい！彼の言葉はサポセンのBGMである。流れている。もちろん、褒め言葉である。